

半世紀をふりかえって



秋山 洋子

3月25日の卒業式で、大学での仕事はすべて終わった。翌日、3月26日の朝日歌壇に、こんな歌が載っていた。

きのうきょうあしたあさってやなさって そして一年 そして一生

(福島市 美原 凍子)

作者は福島の方なので、3月11日の大震災から1年を経た感慨をこめたのだろうが、私はそこに自分の思いを重ねてしまった。駿河台大学に就任してから、1日1日の平凡であわただしい営みが積み重なって、いつか17年という年月になり、期限が満ちて終る時がきたのだなあ……と。

それにしても、大学の教員として70歳を迎えるという未来像が、私自身の中に結ばれたことはほとんどなかった。子供時代は将来の夢をいろいろ思い描くものだが、私は具体的に何かになりたいと強く願ったことはない。そもそも今から半世紀前の少女にとっては、未来を描けるような役割モデルは皆無といってよかったのだ。周囲を見渡せば年長の女たちはみな専業主婦、なにか自分にできる仕事をみつけて、それで食べていきたいと漠然と思ってはいたものの、そこへどうやって行き着くか、まったく見当がつかなかった。

それがなんとか手探りしながら、70歳まで自分の仕事をもって生きてこられた。駿河台大学での17年と、そこにたどり着くまでの半生を、この機会に振り返ってみたい。

I

駿河台大学での私のおもな仕事は、留学生の日本語教育だった。それについては3月に刊行された『駿河台経済論集』第21巻第2号に「駿河台大学における留学生教育」としてまとめたので、そちらに譲ることにする。

私が日本語を教えるようになったのは、いろいろな偶然が重なった結果で、日本語教育を専門に学んだわけではない。じつをいうと私が大学で学んだころは、外国人に対する日本語教育という専門分野は大学に存在しなかった。私と同年代の日本語教員第一世代は、民間の日本語学校で教育経験をつんだか、外国人留学生が急増した1980年代に英語や中国語の教師、高校の国語教師など、さまざまな前歴から必要に迫られて日本語教師に転進してきた。日本語教育専門の課程が大学院に設立されるようになったのは、1980年代以降のことだ。

私自身が大学で学んだのは、中国文学だった。大学に入学して第二外国語に中国語を選択したのが中国との縁の始まりだった。私が大学に入学した1960年は、日米安保条約の改定をめぐる反対運動が最高潮に達した時だった。新入生の私も、年上の同級生にかこまれて、戸惑いながらデモに加わった。6月15日の国会デモでは、上級生だった樺美智子さんがなくなった。それからほぼ10年、「60年安保」から「70年安保」にかけての政治の季節を大学の中で過ごすことになった。人並みに議論にも加わり、デモにも参加したけれど、その中でやはり私は自分探しをしていたのだろう。

中国語を選択したのはドイツ語やフランス語に比べて選ぶ人が極端に少ない（たしか2000人ほどいた文系学生の中で、中国語は1クラス20人だった）という天邪鬼な理由からだったが、始めてみると、入口はゆるやかで奥の深いこの言葉が性にあい、学生運動に忙しく欠席する同級生の多いクラスの中では、かなり真面目に授業を受けた。専攻に中国文学を選択し、卒論では旧家の重臣と新思想との間で悩む青年群像を描いた巴金の長編『家』をとりあげた。今とちがって卒論は、400字詰め原稿用紙に手書きである。

修士課程に進学したが、はじめから研究一筋の道を歩もうと思っていたわけではない。4年生大学を卒業した女子学生への求人ほとんどなく、進学は正直いってモラトリアムだった。大学教授という職業は年配の男性としか結びつかず、当時の自分からはほど遠いイメージだった。

修論では、「満州国」から上海に出て魯迅に認められ、戦火に追われて香港で客死した女性作家・蕭紅をとりあげた。女性だから選んだというよりは、繊細で情感ゆたかな作風と、彼女がたどった苛酷な運命とに惹かれたからだ。結果としてはその後の私の中国女性文学研究の最初のステップになった。

研究対象である中国は、当時は日本との国交がなく、留学はおろか、自由な旅行もできなかった。ただ1度だけ、1965年に中国が「日中青年年代交流」という一大イベントを催して日本から数千人の青年を招待し、それに参加する訪中学生参観団という形で中国の土地を踏むことができた。当時の中国は建国の意気込みにあふれた魅力的な国と若い

学生の目には映った。

ところが、翌1966年に「文化大革命」が勃発する。これまで革命的とされてきた人々を含めて、既存の作家や文学作品は軒並み否定され、文学・芸術と名がつくものは存在しない状態になってしまった。そのとぼっちりを受けて、日本国内の中国研究者や研究・友好団体にも亀裂が走り、落ち着いて研究できる状態ではなくなった。

大学内部でも、安保条約の期限である 70年を前にして、全共闘運動が盛り上がってきた。私が入り出していた中国文学研究室でも、学部学生を中心に運動が始まり、私も議論に加わることはあった。大学の古い体質への批判には共感したものの、教員糾弾や大学解体まではついて行くことができず、逮捕された下級生に差し入れをするのがせいぜいだった。当時はまだ言葉にはできなかったが、全共闘の学生が「自己否定」を叫ぶとき、彼らにとって男=人間 (man) という疑いのない自己が確立されている上での否定ではないのか、女=人間 (?) というところから出発する自分には、そう簡単に自己否定はできない、という思いをかかえていたのだろう。

II

私にとって研究の対象領域は中国だが、その底を流れる問題関心は女性、最近の用語ではジェンダーということになる。大学、大学院で選んだ研究テーマも、激動する時代の中での女性の生き方に絞られたが、当時はたまたま自分が心を引かれた作品・作家として選んだので、女性の問題が研究のテーマになるという発想自体が1960年代にはまだ存在しなかった。大学の内外にも「婦人問題研究会」や、井上清『日本女性史』の読書会といったグループは存在したが、当時の私は女だけで集まって小さいことにこだわるよりは、もっと大きい問題に取り組むべきだと肩肘を張っていた。

私が「女」と出会ったのは、1970年、「ウーマンリブ」と呼ばれた女性の運動が日本で起きた時だった。その前年、大学院に籍を残したまま結婚と出産をし、定職もないままに、全共闘運動の末期で機能不全になっていた大学を離れた。外からは母親／妻としか見られない「主婦的状況」に陥ったとき、60年代末にアメリカの女性たちが発した第二波フェミニズムの声が自分の中の声と一致した。当時のリブ運動の中で私や友人たちがしたことは、のちに『リブ私史ノート』(インパクト出版会、1993)としてまとめた。そのとき、中国の女性作家丁玲が1942年の国際婦人デーに寄せた「三八節有感」というエッセイを読み直して、中国では反党的な毒草と批判されたこの文章が、フェミニズムの立場からの鋭い抗議だったことを発見し、「丁玲について」という紹介の文章をリブグループのミニコミに発表した。フェミニズム批評という分野はまだ成立していなかつ

たが、私にとってはこれがフェミニズム批評の第一歩となった。

日本のリブ運動は、1970年に始まり、1975年の国際婦人年（いまは「女性」が公用語になったが、80年代までは「婦人」が使われていた）を転機として、運動としては収束に入るが、その思想はさまざまな形で受継がれていく。そのひとつが、70年代末に誕生した女性学という研究領域である。関東では井上輝子さんら社会学研究者を中心に女性学の研究会、学会が創設され、関西では上野千鶴子さんたちの日本女性学研究会が『女性学年報』を発刊した。

米国で起こった *Women's Studies* を「女性学」と訳し、「女性の、女性による、女性のための学問」と定義した井上輝子さんは、大学時代からの友人だ。語学のクラスは違ったが、キャンパスで希少動物だった女子学生はすぐ知り合いになり、おしゃべりしたり、一緒にデモへ行ったりする仲だった。それが、10年を経てたまたま出かけたリブの集会で顔をあわせて「あら、あなたも？」ということになり、その後また10年を経て日本女性学会などでいっしょに仕事をするようになった。彼女は和光大学で女性学という分野の確立に力を尽くし、私と同時に定年を迎えた。3月27日に彼女の定年と出版を祝う会が開かれたが、日本の女性学／ジェンダー研究の第一世代が一堂に会した感慨深い集まりだった。

話が飛んだが、じつは私は日本の女性学創設期である1970年代末には日本にいなかった。ロシア語専門である夫に同伴して、1974年から81年まで、当時のソ連、モスクワに滞在していたのだ。ソ連という国家体制は80年代ゴルバチョフ首相によるペレストロイカで根底が揺らぎ、90年代には最期を迎えるのだが、その最後の安定期が70年代のブレジネフ時代だった。硬直した社会主義体制はあちこちで破綻を見せていたが、庶民たちは素朴な農民の気質を残し、女が子連れ働きながら暮らすにはほどよいゆるさのある社会だった。ソ連滞在の体験については、帰国まもなく『女たちのモスクワ』（勁草書房、1983）としてまとめた。

III

81年の春、モスクワの小学校に4年まで通い最後の1年を日本人学校ですごした娘と、モスクワ生まれで4歳になっていた息子を連れて帰国した。高島平団地の2DKに住み、息子を保育園に入れるために、とりあえず団地の新聞に就職した。団地の戸数9,000戸、地域の人口5万人というマンモス団地を自転車で駆け回り、地域の人やできごとを取材して記事にする仕事は、日本社会復帰のためのリハビリとしては楽しかったが、主婦パートなみの時給だった。そのぶん拘束時間は少ないので、残る時間で本を読んだり翻訳

をしたり、大学のゼミにもぐりで聴講に行ったりと、頭のリハビリも試みた。

日本で女性学という新しい研究領域が育ちつつあった80年代、たまたま研究対象であった中国のほうも、10年にわたる文化大革命が収束して、「改革開放」という新しい路線に向けて舵が切られた。文革時代に抑圧されていた人間性の解放を求める声が文学としてあふれ出し、女性作家たちがその先頭を切っていた。久しぶりの中国は、以前には見ることのできなかつた素顔を見せはじめていて、それと向き合うのは胸のおどる体験だった。

そんな女性作家を論じた「三つの視点——中国現代の女性作家たち」（『女性学年報』9号、1988）は、中国文学研究への復帰第一歩だった。そのすこし前に、勁草書房の編集者にすすめられて、中国の社会主義をフェミニズムの立場から分析批判したジュディス・ステイシー著『中国の家父長制と社会主義革命』を翻訳した。毛沢東体制の中国を家父長制と断じる視点は新鮮でなるほどと納得させられたが、フェミニズム分析の用語としての「家父長制」は十分浸透していなかったので、邦題は『フェミニズムは中国をどう見るか』となった。あとで編集者は上野千鶴子さんから、「家父長制という原題を使ったほうが売れたのに」と言われたそうだ。この書評会をするということで、末次玲子さん、前山加奈子さんたちの中国女性史研究会に誘われた。それ以来この研究会は、私の研究活動のホームといえる場になっている。

『経済論集』の論文に書いたように、1980年代は日本にとって第二の開国ともいえる時代で、中国をはじめとする外国人留学生が怒濤の勢いでおしよせた。私のような中国文学出身者が大学に就職する標準コースは中国語教員だが、1972年の日中国交回復に始まった中国語ブームのおかげで、中文の同輩や後輩の大部分は大学の職にありついた。「大学解体」を叫んでいた全共闘の活動家にも、結局大学に戻った人は少なくなかった（そのことを批判する気はないが、やはり男には戻るところがあるんだ、という思いがチラッと頭をかすめたのも否定できない）。80年代になると中国語ブームはほぼ落着いて、そのかわり日本語教師の不足が取りざたされるようになった。もともと言葉そのものに興味を持っていた私は、中国留学生に日本語を教えるのは面白そうだと、団地新聞の仕事のかたわら朝日カルチャーセンターで開講されていた日本語教師養成講座に通った。カルチャーセンターとはいえ、この講座は大学や国立国語研究所の専門家を講師にした大学レベルの内容で、週1回3ヵ月単位で組まれた授業を10コマ、3年ほどかけて修了した。修了後、新聞広告に出ていた日本語学校に応募して採用されたが、時給1,000円で授業準備や採点時間は持ち出しという、スーパーのパートのほうがましなくらいの労働条件だ。就学生と呼ばれた生徒たちは、午前、あるいは午後4時間、週5日

の授業が義務付けられているが、それ以外はアルバイトに集中し、生活費と授業料を自分で出すのはもちろんのこと、大学進学のために100万以上の金を蓄え、国の実家に送金さえしていた。そんな状況だから、授業をサボったり、授業中眠りこけている学生ももちろんいたが、その反面、閉塞状況の自国を抜け出して、飢えたように新しい知識を求める若者たちも多かった。ちょうど1989年、天安門広場で学生の民主化運動が起こり、それが一転して残虐に弾圧されるまでの数ヵ月、上級クラスの学生たちと日本の新聞などを教材に運動の経過を追い、盛り上がりから暗転までを北京の学生たちと同時に味わったことは今も忘れられない。

今からふりかえれば私の1980年代は、マンモス団地で二人の子どもを育てながら、社会復帰を一步ずつ進めていた時期だといえる。面白いのは、バブルといわれたこの時代、夫婦共に正規雇用からはずれた暮らしだった私たちには、その実感がまったくなかったことだ。そのかわり、保育料は最低ランク、就学援助もしっかりもらい、福祉の恩恵には十分あずかった。右も左も同じ間取りの団地では、格差を感じることもあまりなく、保育園や学童保育の親たちのつながりの中で、子どもたちはのびのび育っていった。

1990年代になると、日本語学校教師のほかにも、大学での中国語や日本語非常勤の口を紹介された。週5日、毎日違う学校に教えに行く日が続き、家を出て地下鉄の駅に着いたところで「今日のいく先はどこだっけ？」というようなめまぐるしい日々だった。

IV

研究のテーマとしては、90年代に入って、中国の文学だけでなく女性学が加わった。1960年代末から70年代にかけて欧米や日本の女性たちを巻き込んだ第二波フェミニズムは、社会主義体制の壁を越えられなかった。それが20年遅れて、80年代の中国で「女性研究運動」という形で独自の花を開いた。この運動の中心になった李小江は河南省鄭州大学という地方大学の教員で、官の組織である婦女連合会やエリート大学とは離れたところで中国独自の女性学創設を呼びかけ、研究者のネットワークを築きあげた。彼女たちの活動を紹介し、その著作を翻訳する作業は、70年代のリブの時代を再現するような心躍るものだった。李小江は90年代に日本を訪問して中国女性史研究会と交流し、2005年には彼女が開設した大連大学ジェンダー研究センターに私が在外研究で滞在するなど、長い交流が続いている。

文学の世界では、90年代に入ると女としての性的・心理的体験を内部に向かって掘り下げる若い世代の女性作家が台頭してきた。一貫して社会と切り結んできた中国文学の歴史の中で、「私小説」の誕生は新鮮なものとして受け止められたが、日本文学になれた私にはむしろ既視感がつよくてあまり惹かれず、女性作家への関心は、60年代に読ん

だ丁玲や蕭紅という戦前の中国社会を生きた女性作家の再読に向かった。

丁玲については3年ごとの国際シンポジウムがゆかりの地を巡回して開かれており、前山さんなど中国女性史研究会の「四人組」として、丁玲の故郷である湖南省常德、右派としての追放生活から復帰して居を定めた山西省長治、戦争中を過ごした延安などを訪れた。古参革命作家も多い丁玲シンポジウムに、フェミニズムの視点をもちこんだ「四人組」はそれなりのインパクトを与えたと自負している。丁玲や蕭紅、あるいは中国の女性学についての論文や研究ノートは、中国女性史研究会や日本女性学会の会誌のほか、この『論叢』にも寄稿している。それらに映画評やエッセイも加えて編んだ1冊を、『私と中国とフェミニズム』と題して2004年に刊行した。研究書らしくない書名だが、私なりにこれまでの研究の集大成のつもりである。

会議といえば、1995年に北京とその郊外である開かれた第四回国連世界女性会議は、世界中から3万人、日本からも5,000人が参加した一大イベントで、中国政府と国外女性NGOとの駆引きや、会場の嚴重警戒と一般人からの隔離など、さまざまな点で興味深いものだった。大きな矛盾をはらみながらも、中国女性を孤立状態から世界の動きに組みこむきっかけとなったこの会議については、「第四回国連世界女性会議をめぐって——中国における国家と女性」で分析し、中国女性史研究会の『論集 中国女性史』（吉川弘文館、1999）に収めた。

2005年度には大連大学ジェンダー研究センター客員教授として在学研究の機会を得たが、その前後には、日本の植民地支配と日中戦争、コロンタイの中国への紹介と受容という二つのテーマに平行して取組んだ。前者は大連という研究拠点にかかわるものだが、大連では旧満鉄図書館の外国人による利用が制限されるなど、期待したほど現地の資料は見られず、日本で刊行された資料による「戦時下大連・旅順における日本人女性」（『論叢』34号、2006）を帰国後まとめた。日中戦争期の文学に対する関心は「田村泰次郎が描いた〈貞貞〉——『肉体の悪魔』再読」（『中国女性史研究』19号、2010）、「洲之内徹が書いた日中戦争」（『論叢』42号、2011）といった形で継続している。

在外研究中の成果としては、むしろ李小江と共同で編集した論集『戦争とジェンダー：日本の視角』（原題は《戦争与性別：日本視角》，社会学文献出版社）の観光をあげたい。これは、加納実紀代さんを共同編集者に迎えて、日本の研究者による戦争研究論文9編を編集翻訳したものだ。著者は、西川祐子、若桑みどり、早川紀代、加納実紀代、鈴木裕子、石田米子、鹿野政直、上野千鶴子、松井やより。この顔ぶれでわかるように、ジェンダーの視点から戦争を批判的・反省的に検証するという共通点に立ったうえで、日本の戦争研究を概観できるようにできるだけ幅広い研究分野や方法、立場の論

文を選択した。日本人が戦争を反省していないという中国の誤解を解くにとどまらず、中国では疑いのない前提とされている国家や民族を問い直す視点もあえて加えた。翻訳は私たちが直接面識のある中国の若手研究者に依頼した。編集・翻訳には時間がかかり、刊行は2007年になったが、中国のジェンダー研究者にはインパクトをもって受け止められたと聞いている。

ロシア革命に関わったフェミニストであるコロンタイについては、ソ連滞在時代から気になる存在だったが、在外研究期間を利用して北京や上海の図書館を訪ね、日本語経由で中国語に翻訳されたコロンタイの作品を探索した。これについては、1930年代の日本と中国の思想的交流をあとづける視点で「コロンタイの恋愛論の中国への紹介をめぐって」（『駿河台大学論叢』第40号，2010）にまとめた。

V

駿河台大学での経験については、まだ歴史として見直す気分にならないし、多くの方と共有してきたことなので、最後に簡単に触れるにとどめたい。

1995年に就任した駿河台大学は、私にとって50歳を過ぎて生まれて初めての正規雇用の職場だった。研究室がもらえて、ボーナスや研究費がもらえてと、なんだか夢のような気分だった。半年ほどは東京都板橋区にある高島平団地から2時間近くかけて通勤したが、子どもたちも独立する年齢になったので、学バスの停留所まで歩いていける仏子の団地に移り住んだ。それ以来、職住近接は元気で仕事を続けられた大きな条件だったと思っている。

私が採用されたときは、語学や教養科目の教員の人事権は一般教育協議会にあったので、鈴木慎一先生に最終面接を受けたあと、経済学部長の荒先生に紹介されたと記憶している。就任1年目の95年が一般教育協議会最後の年で、翌96年の現代文化学部発足と同時に協議会はなくなり、かわりに教養文化研究所が創設されて『論叢』の発行元もここに移った。初代の所長は内田康夫先生だった。

一般教育協議会がなくなっても、2000年代になるまでは、協議会が中心になってつくった教養教育のカリキュラムが生きていた。日本語教育専門の私にとって一般学生対象の授業は、最初は教養演習1コマだけだった。在日外国人問題を扱った「隣の外国人」、妹尾河童の『少年H』をテキストにした「自伝を読む、書いてみる」、いろいろな角度から日本語について考察する「日本語」など、いくつかのテーマでやってみた。テーマを設定して学生を集められる教養演習は、学部を超えて面白い学生が集まり、やりがいのある授業だった。総合講義も、「女と男」を何回か担当した。複数教員の共同作業な

のでコーディネーターの負担は大きかったが、これも本学の特長として誇れる授業だったと思う。後に学部横断の副専攻が提起されたとき、これらの経験の積み重ねの上ではなく、別方向からあわただしく企画され、その強引さへの反発が短期間での中止につながったのは残念なことだった。

教養文化研究所は、私にとっては大学生活の中で、学部とならんで大切な場所だった。この場があったおかげで、専門やキャラクターは多様だが、共通の基盤で話すことのできる方たちと知り合うことができた。研究懇話会に集まる人数の少ないのは残念だが、それだけに興味深い発表を聞くだけでなく、学内の問題についても忌憚なく情報交換や論議ができる場となっていた。学部やセンターによる縦割りがますます厳しくなりそうな今後、教養文化研究所という場所の持つ意味は大きいと思う。

学内のつながりで、私にとってもう一つ大きかったのは、女性たちのネットワークだ。就任当時、経済学部の女性教員は、「うるわしい女性たちの会」を自称して、食事をしたりハイキングに行ったりした。その後学部の移動や人の交代があり、近年は激務に追われることもあって、集まる機会も少なくなったが、それでもなにかあれば話を聞きあうことでストレスの解消に役立っている。

教員同士だけでなく、女性職員との交流もあった。職場でのセクシュアル・ハラスメントが公にとりあげられるようになった2000年ごろ、本学でもハラスメント対策委員会を立ち上げることになり、準備の一人に選ばれた。このときは教員と職員が同じ場で討論し、委員会のシステムやガイドラインの作成に知恵を絞ったが、副産物として女性教職員の懇談会を企画した。ハラスメント対策といっても、紙に書いた制度を整えるだけでは仕方がないので、当事者である教職員の生の声を聞きたいと、事前に数人で相談したうえで年度最後の会議で事務局長に提案し、いきおいで開催許可を取ってしまった。職員は時間に制約があるので、春休み期間の昼休み、弁当持参というきつい条件だったが、予想以上に多くの教職員が参加した。日ごろそれほど接触のなかったベテランの先生が子育てしながら研究を続けた話をしてくださるなど、楽しくて充実した会になった。当時は職員もみな若くて、出産して仕事を続けていたのは富岡さんと高塚さんくらいだったが、そのあと職員にも教員にも仕事と育児を両立する人たちがどんどん続き、いまや「少子化」はどこの話かという状況になっている。女性教職員の懇談会も、いろいろな事情で結局3回しか開けなかったが、若い世代の女性たちをサポートしたいという気持は伝わったのではないだろうか。

ハラスメント相談員になった最初の年は、3人の女性教員から、それぞれ別の男性教員に怒鳴りつけられたという訴えを聞いた。中には予想していなかったベテラン教員か

らの訴えもあり、この問題はまだ根深いのだと気づかされた。ほかの先生からは、ハラスメント委員会が発足したことで、発言に気をつける人がふえたようで、以前より学部の雰囲気は良くなったと喜ばれた。ハラスメントの問題は、男性から女性に限らず、上司から部下へ、教員から職員へといった力関係の矢印にそって行われがちで、まだまだ解決したとはいえない。今後もきちんと対応していく必要があるだろう。

思うままに書き綴っていくときりがないので、まとまらないままにこのあたりで筆をおくことにする。駿河台大学での17年間を支えてくださったかたがたに感謝し、厳しい状況の中ではあるが、ご自分を大切に今後もいい仕事を続けられるように祈っている。